

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告102

富山市番神山古墳・番神山横穴墓群 発掘調査報告書

— 民俗民芸村周辺法面保護工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2020

富山市教育委員会

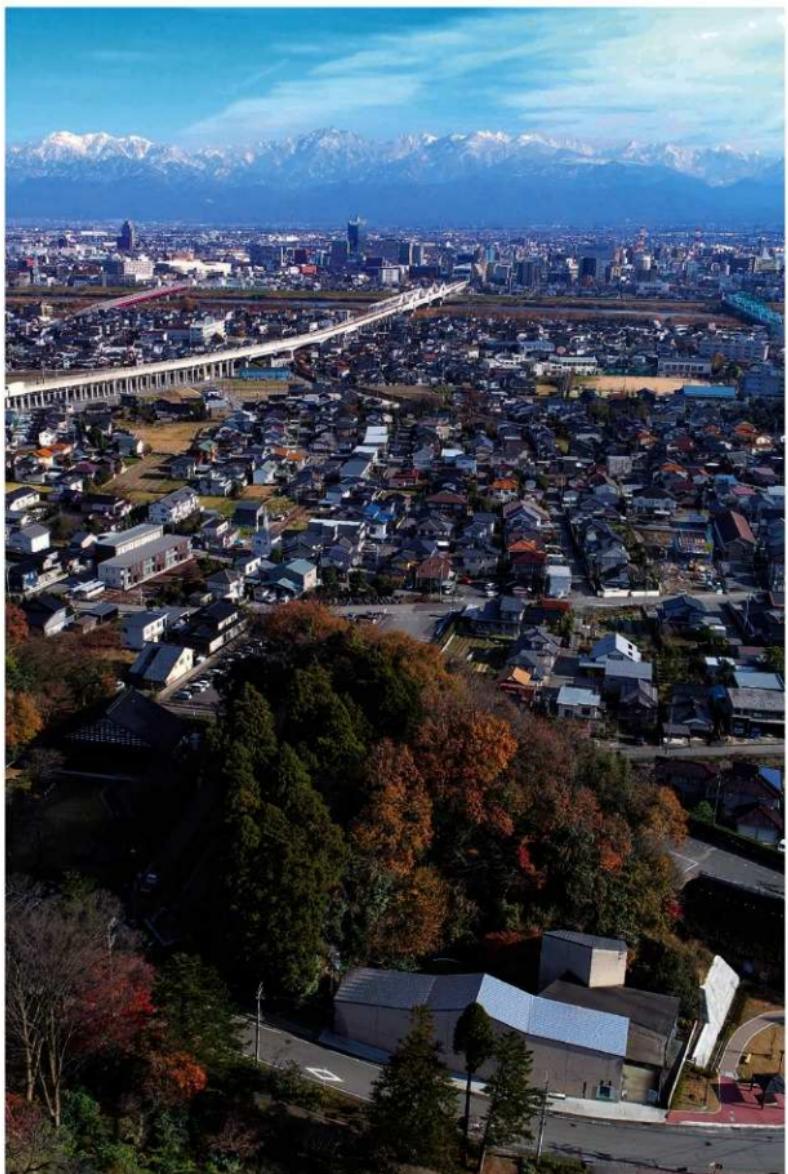
富山市埋蔵文化財調査報告102

富山市番神山古墳・番神山横穴墓群 発掘調査報告書

— 民俗民芸村周辺法面保護工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2020

富山市教育委員会



番神山古墳全景（西から）



番神山古墳全景（北東から）



番神山古墳全景（南西から）



番神山古墳断面（北から）



番神山古墳墓壙断面（北から）



S X01断面（北西から）



番神山横穴墓群 A 9・A10号墓開口状況（南から）

例　　言

- 1 本書は、令和元年度に実施した富山市安養坊地内における番神山古墳・番神山横穴墓群の発掘調査報告書である。
- 2 調査は民俗民芸村周辺法面保護工事に伴い実施した。
- 3 調査は、富山市（生涯学習課）から工事を受注した松原建設・篠川組民俗民芸村周辺法面保護工事共同企業体の下請負として、株式会社エイ・テックが埋蔵文化財センターの監理のもと実施した。
- 4 調査の概要は以下の通りである。

遺跡所在地	富山市安養坊地内
調査面積	984.3m ²
現地作業期間	令和元年11月19日～令和元年12月17日
整理作業期間	令和2年3月26日～令和2年11月30日
監理担当者	鹿島昌也（富山市埋蔵文化財センター専門学芸員） 野垣好史（同 主査学芸員）
調査担当者	岡田一広（株式会社エイ・テック）
- 5 本書の執筆は第3章第1節を岡田、それ以外を野垣が行った。各々の文責は文末に記した。全体の編集は野垣・岡田が担当した。
- 6 自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託し、第4章に成果を掲載した。
- 7 現地調査から報告書作成にあたり、次の方々よりご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表する（五十音順・敬称略）。

池田敏雄	伊藤雅文	太田道人	小黒智久	佐伯哲也	澤田秀実	清水海渡	高橋浩二
西井龍儀	藤田富士夫	藤田将人	古川知明	増潤佳子	吉岡 翼		
- 8 原図・写真等は富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

- 1 本書で用いた座標は世界測地系第VII系（2011）である。方位は方眼北、水平基準は海拔高である。
- 2 土層の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
- 3 参考文献は第5章の後にまとめた。ただし、第4章の自然科学分析は同章の末尾に掲載した。
- 4 本文中の参考文献の表記について、一部を次のように略した。

教育委員会→教委	（公財）富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所→富山県財團
----------	-------------------------------
- 5 第1・5図は、富山市基本図をもとに作成した。

目 次

卷頭図版	
例言・凡例	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 発掘作業及び整理等作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3節 周辺の古墳について	9
第3章 調査の方法と成果	12
第1節 調査の方法	12
第2節 番神山古墳の墳丘測量調査の成果	13
第3節 断面調査の成果	15
第4節 地表面で確認された横穴墓	22
第4章 自然科学分析	24
第1節 放射性炭素年代測定	24
第5章 総 括	26
第1節 番神山古墳の墳丘形態と埋葬施設の復元	26
第2節 番神山古墳の築造時期	29
第3節 番神山古墳が提起する問題	31
引用・参考文献	32
図 版	
報告書抄録	

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

原因工事の経緯 奥羽丘陵北部の東麓、富山市安養坊にある富山市民俗民芸村は9館からなる文化施設群である。周囲を丘陵に抱かれた谷あいに施設が点在する。これら施設の周囲は、過去の土砂採取工事等で、崖状の法面となつた地点がある。法面は地層が露出し、対策が施されていない状態のため、これまで何度も小規模な崩落を起こして安全上の問題があった。

こうした現状を受け、教育委員会生涯学習課は、令和元年度から法面の保護工事を実施することとし、平成30年度に土質調査、測量、危険度判定、実施設計等を行つた。これを受けて保護方法を検討した結果、施工性・経済性に優位な「鉄筋挿入工」を採用することとなつた。法面には吹付法枠工を併設し、斜面崩壊を防止するとともに、法枠内は植生工を導入し、法面の緑化を図ることとした。

工事対象は、急傾斜の法面となっている4地点である。令和元年度は、このうち法面沿いに歩道があり、最も早急な対策を要する陶芸館南側の法面（M3法面）984.3m²を対象とした。この法面は、昭和40年（1965）の土砂採取工事で尾根が切り通し状に削平されたために生じたもので、尾根削平後の跡地には後に陶芸館と考古資料館が建てられ現在にいたる。

埋蔵文化財調査の経緯 上記の昭和40年土砂採取工事の際、尾根の東斜面で横穴墓7基が確認された。また、昭和3年にも南側の尾根西斜面における土砂採取工事で8基の横穴墓が発見されている。これらの発見により今回の工事対象地を含む一帯は、番神山横穴墓群（市No2010225）として遺跡地図に登載されている。

今回工事対象の法面は、東側斜面付近で横穴墓が確認されており、工事の際にも見つかる可能性があるため、工事主体である生涯学習課、工事の設計管理を担当する公園緑地課、埋蔵文化財センターの三者で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行つた。工事箇所は急崖で、事前の試掘調査は困難なことから、法面掘削時に埋蔵文化財センター職員が立ち会い、遺構が確認された場合は工事を中断して発掘調査を行うこととした。工事は「民俗民芸村周辺法面保護工事」として、令和元年7月1日から令和2年3月13日の工期（後に令和2年12月11日まで工期延長）で生涯学習課から発注された。松原建設・篠川組民俗民芸村周辺法面保護工事共同企業体が受注し、埋蔵文化財が確認された場合は、その下請負として株式会社エイ・テックが調査を行うこととなつた。文化財保護法94条第1項に基づく通知は、令和元年6月26日付けで提出され、7月1日付けで県教育委員会へ副申しした。

遺構の確認 工事は、樹木伐採と法面下に堆積している崩落土の除去からはじめた。法面の掘削工事は9月4日から開始した。法面は平地との比高差が最高で20m余りあり、通常のバックホウではアームが届かないことから、ロッククライミングマシーンを用いて行われた（第2図）。法面の上の樹木にワイヤーを結び、ウインチを巻き戻しして機体を上下させながら法面を薄く掘削した。

掘削は法面西側から順次行い、9月12日までに大方の掘削を終えた。この際、頂部の断面に大きな掘り込みがみえ、その底面に2ヶ所の礫群を確認した。また、西斜面にV字状の掘り込みのような土層が認められ、遺構の可能性があると判断した。これらの取り扱いを生涯学習課、公園緑地課と協議し、断面を人力で精査する必要があることを確認した。作業は、9月25日に高所作業車を使用し、埋蔵文化財センター職員が、頂部の掘り込みと西斜面のV字の掘り込み部を中心に握り鏟で断面を削った。その結果、頂部の掘り込みについては逆台形状の断面形が明確になり、底面の礫群は一段低

く掘り窪められた両端に配置されている状況が認められた。また、幅8m、深さ2m程度の規模であることもわかった。遺物は出土しなかったものの、掘り込みや礫群の状況、墳丘とみられる高まりを確認できること、頂部が平坦に造成されていることなどから、古墳が存在し、頂部の掘り込みは墓壙と判断した。一方、西斜面で確認されていたV字状の掘り込みらしき痕跡は、色の異なる土が付着していたことによるもので、遺構ではないことが判明した。

遺構の保護 この結果を受け、再度、生涯学習課、公園緑地課と協議し、遺構の保護措置を検討した。当初の工事計画では、墓壙範囲を含む法面中央部の法枠格子点に、2m間隔で深さ1.6m~4.6mのロックボルトを打ち込み、法面の崩落を防止する計画であった。しかし、この計画だとロックボルトが墓壙を貫通することになるため、墓壙部分を避けて挿入ができるいかを公園緑地課で検討することとした。また、これとは別に、工事側において基盤土質が当初想定より弱いことが明らかになったため、ボーリング調査を行い、工法の再検討を行うこととなった。以上の埋蔵文化財の保護とボーリング調査結果を受けた構造再計算の結果、法面下部のロックボルトの深度を深くすることで墓壙部分への打ち込みは避けることが可能となった。墓壙部分は、原則として一辺2m間隔の法枠の格子点に打ち込む主アンカー（径1.9cm、深さ約55cm）と、50cm間隔で打ち込む補助アンカー（径1.3cm、深さ約25cm）のみのごく軽微な損傷で済むことから、墳丘と墓壙を現状のまま残した状態で工事を進めることで、令和2年6月までに協議が整った。その後、令和2年6月22日から法面工事を再開した。

上記の工法の再検討を行っている間に、露出した墓壙と墳丘断面の土層確認と記録作業、及び現況の墳丘測量図の作成を次節とのおり実施した。これら作業は株式会社エイ・テックが行った。

また、本墳の発見を受けて、「番神山古墳」（市No2011057）として跡地図に新規登録した。

第2節 発掘作業および整理等作業の経過

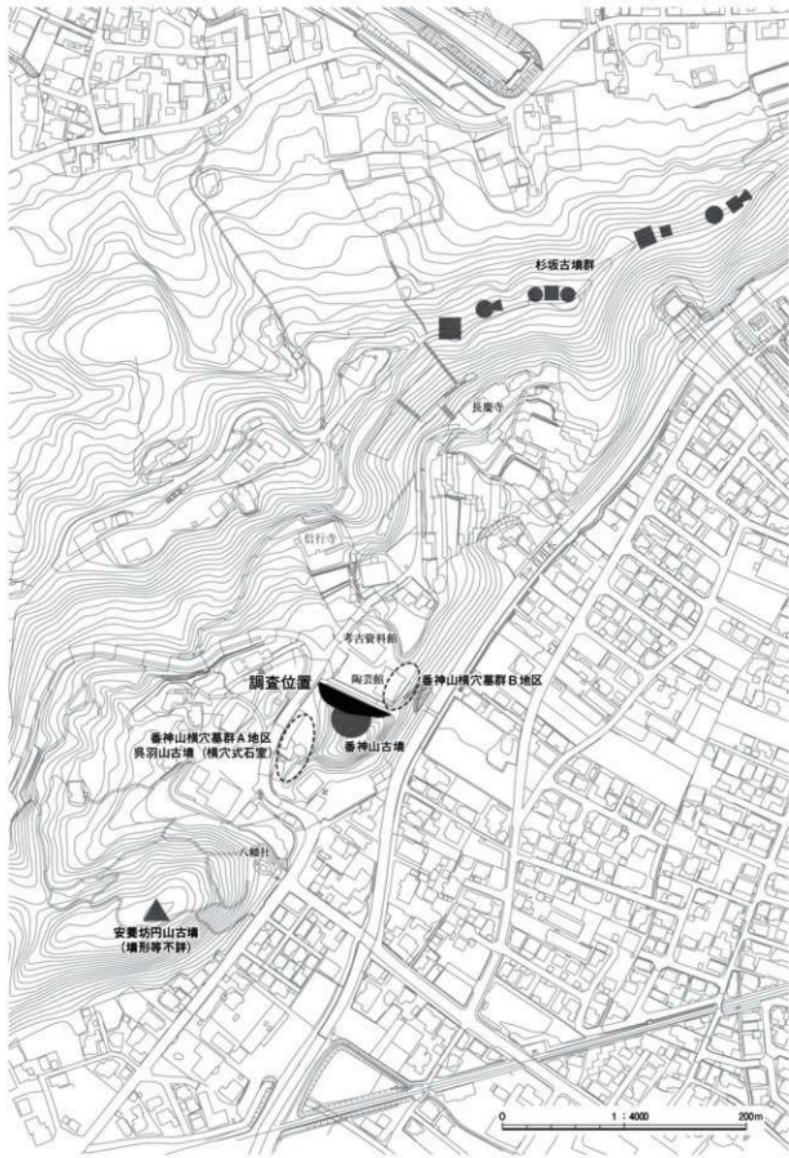
発掘作業 法面の土層確認作業は、令和元年11月19日から27日まで高所作業車を用いて行った。法面全体のうち地表から1.5~2.5mの範囲を人力で削り、墳丘と周辺部の土層を確認した。この過程で、新たに東端付近において方形形状の掘り込み、また西斜面で横方向にV字形に掘り込まれるような土層を認めた。前者は遺構と考え、古墳時代の横穴墓羨道部の可能性もあると判断したが、後者は横穴墓の可能性は低いと考えられた（第3章第3節参照）。分層後、断面図作成のためのオルソ用写真撮影、土層注記作業を行った。上記作業の後、11月22・27日にラジコンヘリとドローンによる空中写真撮影を行い、断面調査を完了した。

11月29日からは、番神山古墳の墳丘平面測量のため密生している笹と雑木の伐採を行った。12月6日からトータルステーションを用いた測量作業に取りかかった。測量作業は17日に完了した。

伐採後の12月16日、古墳南側の斜面に2つの穴が小さく開口していることを確認した。うち1基の内部をカメラ撮影したところ、アーチ状の天井が確認でき、横穴墓と判断した。この横穴墓も古墳の平面測量図に示した。上記作業を経て、墳丘の平面測量図と法面の断面図を作成した。

なお、令和2年3月から5月にかけて埋蔵文化財センター職員が現地において土層等の再確認と一部修正を行った。また、9月7・8日に墓壙底面の礫群について、埋蔵文化財センター職員がピンホールで礫の続き具合を確認する作業を行った。以上の一連の現地作業において出土遺物はなかった。

整理作業 整理作業・報告書原稿作成は令和2年3月26日から開始した。放射性炭素年代測定は、株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。原稿作成と編集作業は、埋蔵文化財センターの野垣と株式会社エイ・テックの岡田が分担して行い、令和2年11月30日に本書を刊行した。 (野垣)



第1図 調査位置と周辺の古墳



工事前（北西から）



伐採後（北西から）



ロッククライミングマシンによる掘削（東から）



法面の土層確認（東から）



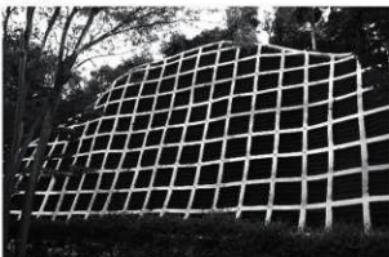
法面掘削後（北から）



填丘測量



法枠吹付状況（北西から）



植生工完了（北から）

第2図 工事と調査の工程

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

富山市は、平成17年（2005）の市町村合併により、富山県の中央部から南東部まで県域の三分の一近くを占める広大な市域となった。北は富山湾、東は立山連峰、西は丘陵・山村地帯が連なり、南は岐阜県境に接して広大な森林が広がる。番神山古墳・番神山横穴墓群は市域北西部に位置し、市街地から北西3kmの呉羽丘陵東斜面に立地する。

県域の中央を南北に延びる呉羽丘陵は、富山県を東西に二分する。東側は「呉東」、西側は「呉西」と呼ばれ、文化や気候面の境界をなすとともに、第3節で触るとおり古墳の様相も東西で異なる。呉東に広がる富山平野は、神通川と常願寺川の流域に形成される。常願寺川は県南東部の山岳地帯に水源をもち、上流に立山カルデラの大崩壊地があることから莫大な量の砂礫が供給され、広大な扇状地を形成する。神通川扇状地は比較的小さく、下流の富山市街地以北は流路変遷の跡や自然堤防・後背湿地が広がる。一方、呉西の射水平野は、縄文時代前期には海進によって丘陵の裾あたりまで海岸線が入り込んでいた。全体的に低湿の海岸平野が広がる。

呉羽丘陵は、南西端の富山市境野新から北東端の富山市八ヶ山まで約7kmの長さがある。北東端から約2.3km南西で深い開析谷があり込み、この谷を開削して主要地方道富山高岡線が丘陵を横断している。この地点より北側の丘陵が呉羽山、南側が城山と区分される。呉羽山の最高点は標高71.3mの御野立所地点、城山の最高点は標高145.3mの城山頂上地点である。丘陵の最大幅は約2.5kmで、東斜面は急崖が多く、西斜面は全体的に緩やかで馬背状の尾根がなだらかに続く。

番神山古墳と番神山横穴墓群は、丘陵北部（呉羽山地区）の東斜面、主丘から南西に突き出た尾根に立地する。この尾根は「番神山」と呼ばれ、小字にもなっている。現在は番神山古墳の北側が大きく削平されており、古墳は小さな独立丘に立地しているようにみえるが、これは昭和40年の土砂採取によって尾根が寸断したためで、本来は尾根の先端付近に位置していたことになる。

呉羽丘陵の形成は約100万年前の海成層に始まり、その後隆起により陸化して、50~30万年前には神通川から運ばれた砂礫が堆積した。

その後さらに隆起し、河道は丘陵東側に移り、浸食により直線的な急崖をつくって、ほぼ現在の状態となった（高潮監修1994）。地質は、下から新第三系の西富山砂岩層、安養坊砂泥互層、長慶寺砂層が西に傾いて堆積し、その上に傾動しない呉羽山礫層、峠茶屋礫・砂泥互層、北代砂層、友坂段丘礫層が分布している。

（藤井1994・2000）。

このうち古墳や横穴墓の基盤層となっているのは、安養坊砂泥互層である。同層は、下部では互層の單



第3図 番神山古墳位置図

位が50～100cmと厚いが、上部では10cm前後になる（藤井2000）。今回工事対象の法面は、西下がり（向かって右下がり）の地層を明瞭に観察できる。層の下部にあたる法面東部は、一部青みがかった灰黄褐色の軟岩状の層がみられるが、上部にあたる中央から西部は、砂層と泥層の薄い互層状である。また、安養坊砂泥互層は、貝化石や植物化石を産出することが知られており、今回の工事対象地においても二枚貝や葉の化石を認めた（第4図）。

現在、尾根上はスギ等の樹木や雑木、笹等が密生している。明治から昭和期は畑として利用され、現在も段々畑の痕跡を一部認めることができる。尾根の東裾に沿って牛ヶ首用水が北流し、それ以東は標高10m前後の平野となる。



第4図 基盤層から産出する貝化石

第2節 歴史的環境

令和2年10月末時点で富山市には1043ヶ所の遺跡がある。番神山古墳、番神山横穴墓群が立地する呉羽丘陵の周辺は、そのうちのおよそ5分の1にあたる約200ヶ所の遺跡が分布する。県内で最も遺跡が集中する地域のひとつで、旧石器時代から江戸時代まで連綿と人為活動の痕跡がみられる。地形変化に富み、遺跡の種類も集落、生産、墳墓、山城等と多様である。

旧石器時代 本墳に近い丘陵北部の北代遺跡でナイフ形石器等が出土しているが、多いのは丘陵の南部周辺である。境野新遺跡は石核、剥片が出土し、製作遺跡とみられる（西井・藤田1976）。向野池遺跡では、縦長剥片素材の周縁調整尖頭器がある（富山市教委2000）。北押川B遺跡では、東山系の石刃と搔器、杉久保系のナイフ形石器が出土している（富山市教委2008b）。また、開ヶ丘中山IV遺跡では関東系の茂呂型ナイフ形石器の出土がある（富山市教委2001）。石器の出土数の多い境野新遺跡、北押川B遺跡以外は、完形の石器が単独あるいは少量出土する傾向があり、短期間の行動の痕跡と評価されている（西井・藤田1976）。

縄文時代 呉羽丘陵西麓の台地や北に広がる沖積低地において多くの遺跡が形成された。

前期は、丘陵直下の平野部との境界付近、海岸線から約4km内陸に小竹貝塚、蜆ヶ森貝塚があり、縄文時代前期にピークを迎えた海進の位置を示す。小竹貝塚では北陸新幹線建設に伴う発掘調査で、前期としては国内最大級の貝塚や埋葬人骨が発掘された（富山県財团2014a）。

中期は、呉羽丘陵西麓の台地を中心に多くの集落遺跡がある。最大の集落は北代遺跡で、早期から晩期まで営まれ、中期中葉から後葉を主体とする。確認されている竪穴建物は78棟に及び、集落中央に掘立柱建物を配して竪穴建物が取り巻く構造を呈する。北陸を代表する縄文遺跡として国史跡に指定されている（富山市教委1999）。北代遺跡の北西300mに位置する北代加茂下III遺跡は、中期前葉から中葉の集落である。柱列が二重にめぐる長大な掘立柱建物は、集落のシンボル的な建物とされる（富山市教委2004a）。

後期から晩期は集落数・規模ともに縮小する。長岡八町遺跡は、後期後葉から晩期前葉に盛期があり、掘立柱建物のほか、谷部から多量の土器・石器とともに土偶や祭祀遺物が出土した（富山市教委2003）。このほかには長岡杉林遺跡で竪穴建物1棟が検出されている（富山市教委1987）。

弥生・古墳時代 弥生時代中期以前の遺跡は少なく、近くでは北代遺跡や百塚遺跡で遺物が出土している程度である（細辻2010）。その他地域も少規模な遺構と少量の遺物がみられるにすぎない。後期には集落が急増し、古墳時代前期まで続く例が多い。海岸近くの平野に多く所在し、打出遺跡、四方荒屋遺跡、四方背戸割遺跡、江代割遺跡、今市遺跡などが知られる。打出遺跡は当該期として県内最多の鉄器が出土し、神通川・常願寺川下流域における拠点的集落と評価される（富山市教委2004b）。古墳時代中期以降は、呉羽丘陵西側の平野部に位置する八町II遺跡で前期前半と中期前半の集落が発掘されている（富山市教委2008a）。また、呉羽丘陵南部の西麓にある古沢A遺跡や境野新遺跡で中期の竪穴建物が検出されている。古墳時代の集落は呉羽丘陵の西側で主に確認されており、番神山古墳から望める丘陵東側の近辺の平野部では、当該期集落は未確認である。

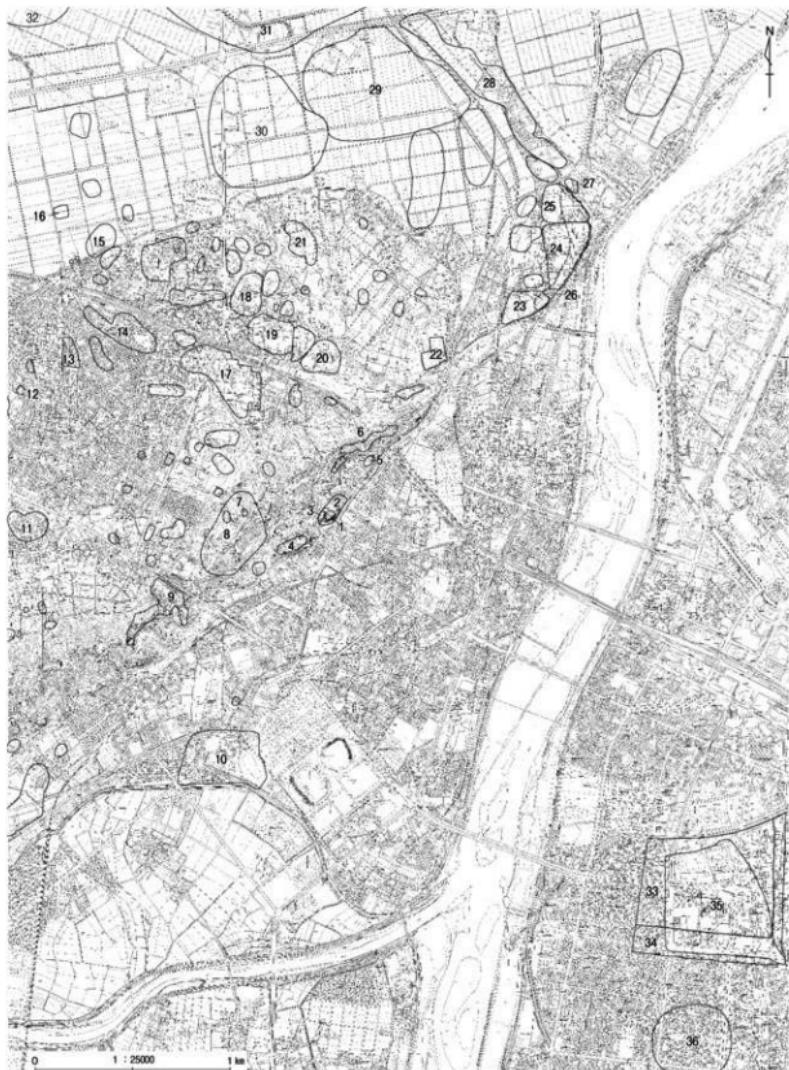
墳墓・古墳は呉羽丘陵上とその周辺に多く存在する。丘陵北端の百塚住吉遺跡と百塚遺跡では、近年の調査で弥生時代後期後半から古墳時代前期前半を中心とする30基に及ぶ墳墓群が発見された（富山市教委2009・2012）。呉羽丘陵の南部では、杉谷古墳群において四隅突出型墳丘墓を含む弥生時代終末期から古墳時代前期前半の墳墓があり、杉谷A遺跡の方形周溝墓群からは、素環頭鉄刀、ヤリガンナ、鉄素材、銅鏡、ガラス小玉が出土した。杉谷古墳群の北側には、総数40基以上からなる呉羽丘陵古墳群がある。主要古墳として、前期と考えられるNo16号墳（前方後円・38m）、中期と考えられる古沢塚山古墳（前方後円・41m）、後期と考えられるNo26号墳（前方後円・20m）がある。同古墳群内には12基以上からなる金屋陣ノ穴横穴墓群もある。呉羽丘陵の南に連なる羽根丘陵には、弥生時代後期から古墳時代の墳墓・集落からなる国史跡王塚・千坊山遺跡群がある。前方後方墳の勅使塚古墳（66m）、王塚古墳（58m）を中心に、四隅突出型墳丘墓、円墳、方墳などで構成される。また、呉羽丘陵北部の今回の工事対象地付近では、後期～終末期の番神山横穴墓群や横穴式石室墳の呉羽丘陵古墳が確認されている。これら対象地周辺の古墳は次節で記す。

古代 奈良・平安時代は、呉羽丘陵一帯で多数の集落が形成され、製鉄・製陶等の生産遺跡も展開する。近くでは、呉羽丘陵西麓の台地に北代遺跡、長岡杉林遺跡、呉羽小竹堤遺跡、呉羽富田町遺跡などがある。掘立柱建物、竪穴建物、鍛冶工房等が検出されており、開墾集落が爆発的に増加する様相がうかがえる。集落は、奈良時代には丘陵縁辺や台地に多く立地するが、平安時代は平野部に広がり、開発がより低地に及んだことがわかる。また、長岡杉林遺跡では瓦塔・綠釉陶器・灰釉陶器など仏教的色彩の強い遺物が出土しており、他の集落とは異なる性格を有していたとみられている。

呉羽丘陵南部では、6世紀末～7世紀初め以降に須恵器窯、炭焼窯などが多数築かれ、製陶・製鉄の大規模生産地の様相をみせる。生産は9世紀後半にピークを迎え、10世紀には衰退する。

中世 平安時代から中世にかけて、呉羽丘陵北側に広がる沖積平野（射水平野）の開発が進み、莊園が形成される。この地域には「寒江莊」、「倉垣莊」が置かれた。寒江莊は、「倭名類聚抄」に「塞口郷」、「正倉院文書」には「越中國射水郡寒江郷」と表記されており、奈良時代以来所在したことがわかる。明徳4年（1392）の「右馬頭範氏奉書案」などには京都市下鴨神社領であることが記され、江戸時代には10ヶ村が属していた。現在の富山市寒江地区周辺が比定地である。八町II遺跡では方形の区画溝が検出され、寒江莊に関連する集落と指摘されている（富山市教委2008a）。また、八ヶ山A遺跡でも3条からなる区画溝を検出し、寒江莊に含まれる集落の可能性がある（富山市教委2015）。

海岸に近い平野部では、「廻船七目」にあげられる三津七湊のひとつ「越中岩瀬湊」に面する港町性格をもつ複数の集落が発掘調査で確認されている。四方北窓遺跡、四方荒屋遺跡、打出遺跡などが知られる。



1. 番神山古墳 2. 番神山横穴墓群 3. 具羽山古墳 4. 安養坊円山古墳 5. 長慶寺古墳 6. 杉坂古墳群 7. 北代西山Ⅲ道跡 8. 茶屋町東道跡
 9. 明神山道路 10. 大船城跡 11. 具羽モグラ池道跡 12. 具羽三ツ塚古墳 13. 具羽小竹堤道跡 14. 北代中尾道跡 15. 鳥ヶ森貝塚
 16. 具羽町北道跡 17. 具羽富田町道跡 18. 北代加茂下皿道跡 19. 北代道跡 20. 長岡杉林道跡 21. 長岡八町道跡 22. 富山藩主前田家墓所
 23. 八ヶ山道跡 24. 百塚道跡 25. 百塚住吉道跡 26. 百塚古墳群 27. 百塚住吉B道跡 28. 百塚住吉D道跡 29. 八ヶ山A道跡 30. 八ヶ山Ⅱ道跡
 31. 今市道跡 32. 具羽野田道跡 33. 富山城跡 34. 富山城下町道跡主要部 35. 総曲輪道跡 36. 千石町道跡

第5図 周辺の遺跡

第3節 周辺の古墳について

今回の工事対象地の尾根では、その先端付近の頂部に番神山古墳が立地する。そして古墳から10~20m下の南西および東斜面で、過去に古墳時代後期から終末期の番神山横穴墓群が確認されている。昭和3年（1928）には、土砂採取工事に伴い南西側山腹で8基の横穴墓が不時発見され（A地区・第7図）、大村正之氏により緊急調査と報告がなされた（大村1931a）。出土品の一部は当初、富山県立図書館で収蔵されたが、戦災に遭い失われたようである（岡崎1967）。昭和40・43年にも土砂採取工事の際、東斜面で7基の横穴墓（B地区）が不時発見され、岡崎卯一氏により調査報告がなされた（岡崎1967・1968）。このときの出土品は、個人の手で保管されていたものもあるが、昭和54年に富山市考古資料館が開館したのち同館に所蔵された。また、平成元年（1989）には今回工事対象の法面下で須恵器が採集されている（山崎1992）。番神山横穴墓群は、日本海沿岸では横穴墓の分布の東限にあたり、以東は新潟・山形県域まで確認されていない。

横穴墓のはかに古墳も存在する。番神山横穴墓群A地区内では、昭和4年、前年から続く土砂採取工事に伴い後期の横穴式石室墳（呉羽山古墳）が発見された。工事破壊後に、大村正之氏により聞き取り調査が行われ、報告されている（大村1931b）。赤褐色の砂質粘土質地山を1.8m掘り込んだ石室掘り方内に横穴式石室が構築されていたという（第10図）。古墳の数は、大村1931bには記載がないが、大村1931aには2基とある。また、岡崎1967では3基とされている。金銅装頭椎大刀、勾玉、ガラス玉、耳環（金環・銀環）、須恵器が出土したが、戦災により失われた。

以上のとおり、番神山古墳と同じ尾根ではこれまで古墳時代後期~終末期の古墳・横穴墓およそ18基が確認されているが、中期以前の墳墓は知られていないかった。

このほかの近くの古墳（第1図）として、本墳から南西200mの谷を挟んだ別の尾根上に安養坊円山古墳がある。尾根頂部に高まりが見られるが、これまで調査は行われておらず、墳形・規模等は不詳である。

また、本古墳の上方、北東約400mの丘陵の主丘上に杉坂古墳群がある。前方後円墳1基、前方方墳1基（方墳2基の可能性もある）、円墳3基、方墳4基の9基前後で構成される。道路工事により削られ、原形をとどめるものはない。6号墳の周溝から高杯1点が採集されている。出現期から前期の古墳とみられるが、円墳が混在しており、中期まで継続する可能性もあるとされる（古川1999）。

約1.8km北東の呉羽丘陵北端の百塚遺跡、百塚住吉遺跡では、近年の調査で30基以上からなる弥生時代後期後半から古墳時代前期前半を中心とする墳墓（百塚古墳群）が確認された。方形周溝墓、円形周溝墓、方墳、前方後円墳、前方後円墳があり、特に前方後円墳は北陸最古段階に位置づけられる。また、これら墳墓を残した呉羽丘陵北部集団が、会津地域へ移動・移住した可能性とともに、墓制（前方後方墳・前方後円墳）を伝えたことが指摘されている（富山市教委2009）。

百塚遺跡の南西に隣接する八ヶ山遺跡は、神明社社殿下に方形状のマウンドがある。一辺約15mの方墳とされてきたが、四隅突出型墳丘墓の可能性も指摘されている（古川2006）。

このように番神山古墳周辺は、詳細不明なものも含むが、弥生時代後期から古墳時代を通して墳墓が造営される環境にあった。

富山県では、前方後円（方）墳がまとまって築かれるのは呉羽丘陵が東限で、これより東は古墳自体の造営が低調となる。さらに俯瞰すると、新潟県の上越地域まで相当の距離にわたって前方後円（方）墳の空白地帯となって、呉羽丘陵が日本海側における前方後円（方）墳の一つの境界をなしている（高橋2015）。このことは、列島規模でみた場合にも呉羽丘陵が重要な位置にあることを示す。（野垣）



第6図 番神山古墳周辺の空中写真（▲の交点が古墳位置、上：米軍1952年撮影 下：国土地理院2007年撮影）



第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

概要 調査は、法面保護工事に伴い現状法面の断面図作成を主体として実施した。調査範囲は、斜面部が地表面より約1.5m幅、頂部および西斜面で横方向にV字形に掘り込まれた箇所周辺は地表面より約2.5m幅までを対象とした。墳丘を含む周辺の平面測量は、法面保護工事対象地区より南側の尾根上約1,800m²を対象とした。

基準点設置 基準点は、法面保護工事の設計用に設置してある既設基準点を元に設定した。座標系は世界測地系（2011）で平面直角座標系第VII系（原点は北緯36° 00' 00”，東経137° 10' 00”）に合わせた。方位は方眼北、水平水準は東京湾平均海面の海拔高である。

発掘作業 発掘作業は、高所作業車（スカイマスター・17mクラス）を使用して、移植ゴテ・振り鏟で精査し土層を分層した。調査は東側斜面より作業を開始し、頂部まで作業した時点で1回目の一眼レフデジタルカメラでの記録撮影およびドローンで測量用写真を撮影した。

1回目の記録後、引き続き西側斜面の作業を実施し、2回目の記録および測量用の写真撮影を実施した。また、同時に全景を撮影した。全景撮影には、ラジオコントロールヘリコプターに一眼レフデジタルカメラを搭載して空中写真撮影を実施した。

墳丘測量 測量対象地は、笹竹類や低木が繁茂しており見透しが効かない場所があり、この箇所の伐採をした後、トータルステーションを用いて三次元観測した。

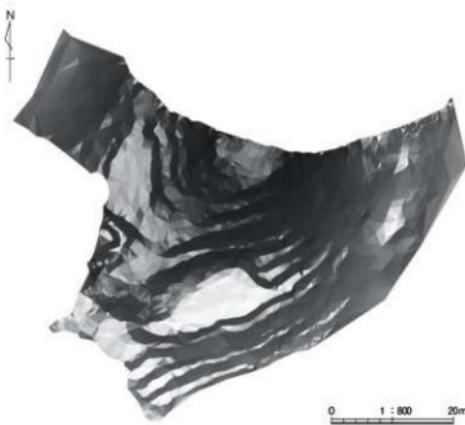
記録作業 写真撮影は、デジタルカメラは35mmフルサイズ（有効画素数3,630万画素）の一眼レフデジタルカメラを使用した。測量等に用いたドローンはDJI社製Phantom 4 Pro V2.0を使用した。

断面図作成は、断面の終起点にX軸、海拔高にY軸を合わせた任意座標系でオルソ画像をAgisoft Metashapeを使用して作成し、Adobe Illustratorで図化した。

平面図作成は、トータルステーションで観測した三次元座標から、QGIS3.6でDEMを作成し、このDEMを元に等高線を作成した。作成した等高線はShape形式で保存し、Adobe Illustrator上で地理情報開発社製プラグインPlugX-Shape4.5を経由して展開し、図化・編集した。平面図および断面図は1/100で作成した。

自然科学分析 調査では遺物が出土しなかった。番神山古墳埋葬施設（墓壙）からは、炭化物を採取できなかつた。S X01最下層（35層）からは炭化物を採取でき、この炭化物から放射性炭素年代測定を実施した。

（岡田） 第11図 番神山古墳C S立体図



第2節 番神山古墳の墳丘測量調査の成果（第14・15図）

古墳の立地 番神山古墳は、呉羽丘陵の東斜面から南西方向に突き出た長さ約200m、幅約80mの尾根上に立地する。第2章第1節で記したとおり、この尾根は昭和40年の土砂採取工事で中央部分が30~70mにわたり切り通し状に削平され、この際、本墳も北側半分が失われた。削平前の尾根の旧地形からみれば、古墳は尾根の先端付近に立地していたことになる。現況の古墳頂部は標高約43mである。削平部を挟んだ北側（考古資料館北側）尾根の標高は約40.4mである。古墳からは東方向に富山平野を一望することができる。

尾根が削平された跡の平地には現在、陶芸館と考古資料館が建つ。ここと墳頂との比高差は20m余りある。また、東に広がる平野と墳頂との比高差は約33mである。

上記した北側の削平だけでなく、古墳の南西側もL字に削られて崖面となるが、この削平は墳丘には及んでいない。南西側の削平は、昭和3年の土砂採取工事で生じた。

古写真にみえる墳丘 第12図は、明治42年発行の『富山県写真帖』（富山県1909）に掲載された「呉羽桃林」と題する写真である。写真的説明には、「呉羽山の東麓より附近の田野に彌りて桃園多く陽春の候に至れば紅霞蒸し錦繡を織り山上より之を望めば風景畫くが如し」とある。地形や道路、背後の平野の見え方から、古墳がある尾根を北西から撮影したものとみられる。削平前の古墳の状況がわかる貴重な写真である。

尾根の左手の高まりが番神山古墳である。現在はこの左側が削平されて崖状の法面となる。正面にみえる斜面の左半分は段々畑状となっている。墳頂は平坦面をなしており、松が生える。近くに住む方によると、昭和40年代までは同様に松が生えていたということである。墳頂平坦面から右へ下る傾斜は、段々畑の上から3~4段目付近の延長線上のレベルで緩くなっているように見え、墳裾を示す可能性が高い。これより右側は、緩斜面の後、急傾斜で落ち込み、低くなった尾根先端へと続く。なお、この尾根の先端付近が昭和3~4年の土砂採取工事で番神山横穴墓群（A地区）や横穴式石室をもつ呉羽山古墳が発見された地点である。

墳頂部 現状の墳頂は、古写真と同様、幅約10mの平坦面となる。感覚的にはほぼ平坦であるが、西側が標高約43.0m、東側が42.5mと、東に向かって少し低くなる。

墳丘西斜面 墳丘西斜面は近代以降の段々畑の跡とみられる平坦面が2ヶ所認められる。上段面が標高39.5m付近、下段面が標高38.25m付近である。37.0~37.5m付近より下は傾斜が緩く、平坦面に近くなる。そして36.0m以下で急傾斜の斜面となる。畑による改変はあるが、37.0~



第12図 明治時代の古写真に見る番神山古墳（北西から）（富山県1909）

37.5m付近の傾斜変換は比較的明瞭で、墳裾を反映していると判断する。ここを墳裾とした場合、墳丘高は地表面ベースで約5.5～6m、斜面の傾斜は約24°である。次節の断面調査でもこのあたりに墳裾の可能性がある立ち上がりを確認できる。墳丘西斜面の等高線は南北方向に直線的なラインをみせるが、烟造成の影響と考える。また、崖面に近い北側で等高線が小さく膨らむのは、スギの大木があることで流れた土砂が溜まったためであろう。

第12図の古写真では西斜面の段々畑は下方まで続くが、現在の斜面下方は若干その痕跡がうかがえる程度で明瞭ではない。急傾斜のため土が流れやすいことや、道路・歩道を拡張した際に斜面を多少削ったことが理由と考えられる。

墳丘南斜面 標高38m付近より上は、若干抉れた状況がみられ、西・東斜面から続く等高線の連続性が途切れている。一方、37m付近より下は、西から続く等高線が逆にやや張り出るように膨らむ。こうした状況は、墳丘上部の土砂が下方に堆積したことで生じたと考えられる。西・東斜面の状況と比較すると自然に流れたことが主因とは考えにくく、近代以降に烟として利用した際、尾根筋を通路などとして利用しやすくなるため、上部の土砂を削って下へ盛ることで傾斜を緩くしたものと推測する。この状況のため、墳裾と判断できる明確な傾斜変換は不明瞭であるが、西側の墳裾からの連続性を考慮すると、37.5m付近をめぐると推測される。

なお、墳丘南西側の崖際に、ドーナツ状に深さ1mほど窪んだ地形がある。中央部は、盛土等がされている状況ではない。具体的な性格は不明である。

そのさらに南側は地形が落ち込み、標高31m付近で再び緩くなる。ここで横穴墓とみられる2基の小さな開口部を確認した（本章第4節）。

墳丘東～南東斜面 東斜面は全体的に急傾斜である。墳丘に相当する上部の傾斜は約39°で、西・南斜面よりかなりきつい。墳丘斜面がそのまま自然斜面へ移行するような状況で、明確な墳裾は認めがたい。次節の土層断面の観察でも墳裾は特定できなかった。ただし、北側の崖面向かうに従い、下方の等高線間隔が若干広がることは注意される。第16図の土層断面図では、標高32m付近で明らかに傾斜が緩くなるが、平面図でみると、標高34m付近から等高線間隔が広がりはじめている。また、第5章第1節で確認するとおり、工事前図面からも標高34m付近を墳裾とみることが適當と考える。この場合、墳頂に対して西斜面の墳裾とおおよそ対称な位置となる。東裾からの墳丘高は地表面ベースで約9.0mとなり、傾斜が急な分、西裾からの高さより3.0～3.5m高い。

南東斜面は、段々畑跡の細長い平坦面が北東～南西方向に認められる。また、標高31～32m付近に約20×7mの平坦面が造成されている。詳しい造成時期は不明であるが、段々畑跡の平坦面と一連になる箇所があることから、近代以降であろう。作業小屋等の施設が置かれた可能性もある。

小 結 以上の測量成果と、次節の土層断面の調査を合わせて、第5章第1節で墳丘形態の復元を行いうが、結論のみ先に記すと第21図のとおり径約32mの円墳と推定する。

なお、第15図の墳丘断面ラインは、南北主軸は南側の尾根筋にはば合せたが、東西主軸について崖面にかかるようとしたため墳頂部の中心を通らない。これによる図上での南北主軸はN-37°-Eである。一方、約65mの削平部を挟んだ北側の尾根筋（標高約40.4m）と結んだ方向はN-27°-Eである。現況での計測ではあるが、南側尾根の方向より10°北向きとなり、尾根筋がやや曲がっていたと推測される。削平された北側の尾根に前方部が存在した可能性もある。その場合、前方部は上記した北側の尾根筋の方向、N-27°-Eを主軸に築成されたと推測される。

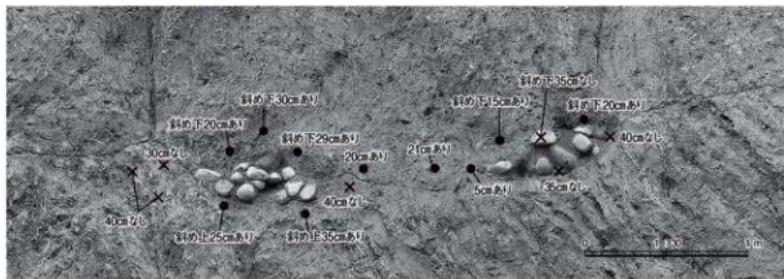
第3節 断面調査の成果（第16～18図）

概要 工事対象の法面は、幅約70m、高さは最高所で20m余りある。このうち、遺構が確認される可能性がある地表下1.5～2.5mの範囲を人力で削り、断面の土層確認を行った。この際、番神山古墳以外の遺構（S X01）などの土層も確認したため、以下それぞれ分けて記述する。なお、断面に一定間隔でみられる地表から下に延びる筋は、法面掘削時にロッククライミングマシーンを固定したワイヤー痕である。

地山 基盤となる地山層は、明黄褐色を主体とする西下がりの安養坊砂泥互層である。第16図の地山の分層は大別したものであるが、細かくみると0.1～1m以上の幾層もの堆積からなる。下層にあたる東部は一部青みがかった灰黄褐色の軟岩状を呈するが、上層にあたる中央から西部は薄い砂層と泥層の互層状である。また、東斜面の中程から下部に堆積するE層は風化層で、地山がブロック状に崩れた状況を呈する。

番神山古墳埋葬施設（墓壙） 墳頂部の断面で墓壙を確認した。断面での規模は幅7.9m、検出面からの深さは、西壁際が1.50m、東壁際が1.56m、中央の最深部で1.89mである。地山を掘り込んだ掘込墓壙の形態をとる。底面は西部が高く、東に向かって低くなる。この傾斜は地表面にも表れている。木棺を置いた底面中央部は、幅2.9m、深さ0.38mで一段低く掘り窪められ、両側は7～20cm大の円礫が配置される。礫群の間の内法は約1.05mで、その間の底面は緩やかに湾曲している。また、墓壙底面の東部（向かって左。以下、向かって左か右かを併記する）に幅0.6m、深さ0.15mの浅い掘り込みが認められる。

調査当初、この断面は、長方形の墓壙の短軸側を捉えたものと考えていた。しかし、墓壙上部の陥没痕が東（左）に延びていること、また木棺が置かれた掘り込み位置が、中央ではなく、西（右）側に片寄っていることから、この断面は長方形の墓壙を斜めに切った、対角線に近い状態を見ていると解釈すれば整合的に理解できると思われた（第21図の復元図参照）。つまり、礫や木棺は断面の真っすぐ奥ではなく、左斜め奥に向かって延びているとの推測である。幸い令和2年9月に、墓壙の高さ付近までロックボルト打込み用の工事用足場が組まれ、墓壙近くに寄ることが可能となった。上記の推測を検証するため、9月7・8日に礫群の奥への続き方をピンボールで確認した。その結果が第13図である。これによると、西（右）側の礫群は、この左で20cm程度奥に礫が確認でき、上記の推測と整合的であった。しかし、東（左）の礫群の左にはこれに続くような礫群は40cm程度奥でも当たらなかった。したがって、左斜め奥に礫群が延びるとの推測が完全に裏付けられるものではなかったが、



第13図 墓壙底面の礫群の確認状況（記載深度までピンボールで確認した際の礫の有無。オルソ画像に加筆）

少なくとも右側の礫群については左奥に延びていると推測できることと、何より上記した陥没痕が東（左）側に広がっていることを重視して、長方形の墓壙の対角線に近い状態の断面と推測する。東（左）の礫群の左側で確認できなかったのは、礫が直線的でなく、凸凹をもちながら延びているために当該地点では当たらなかった可能性や、途切れている可能性がある。

墓壙覆土は、明黄褐色を主体とする土層である。全体的にかなり似通っており、分層は困難であったが、主に地山ブロックの大きさや含有量によって分けた。木棺の痕跡や赤色顔料は確認できなかつた。粘土等を用いて木棺を被覆した構造ではなく、木棺が置かれた墓壙底面の掘り込み部も棺床粘土や整地層といえる層は確認できないことから棺床を考える。22層が棺床土の可能性があるかとも思われたが、整地された状況を確認できないことから棺床ではないと考える。礫の間の掘り込みの地表面をそのまま棺床にしたとみられる。礫の間の掘り込み面とその外側に続く層が緩やかに湾曲しており、第5章第1節で検討するとおり剥抜式木棺と推測する。両側の礫は、それぞれ内側半分程が外に向かって緩やかに上がっており、棺身の両端は礫の上に乗るような状況であったと推測する。また、礫の上面レベルが、おおよそ棺蓋と棺身の合わせ位置付近に当たるとみられる。このようにみるとおよそ18~22層が陥没した木棺内部の土層を示すと考えられる。なお、全体的に東（左）側に比べて、西側の土層の立ち上がりが急角度である点も、現状の断面が墓壙を斜めに切ったものとみれば説明しやすい。

墓壙覆土のうち下層の主体を占める15・24層は、地山ブロックを多く含み、大きい単位で埋めた様子がうかがえる。その上の10層は逆に地山ブロックが少ない層である。最上層は木棺の陥没に伴う黒褐色主体の層（5~8層）が、中央から東部（左）にかけて認められる。この陥没痕の上に堆積する2層は、後述の墳丘部にみられる2層や37層と同じ土質である。

番神山古墳墳丘 墳丘部分は、地表面下0.2~0.7mで地山となる基盤層があり、断面を確認できた東・西斜面はほとんど地山削り出しによって墳丘を築成したと判断できる。確実に盛土と判断できる層は不詳であるが、近代以降畑として使われており、その際に多少の削平があったことを考慮すれば薄い盛土が存在した可能性は否定できない。

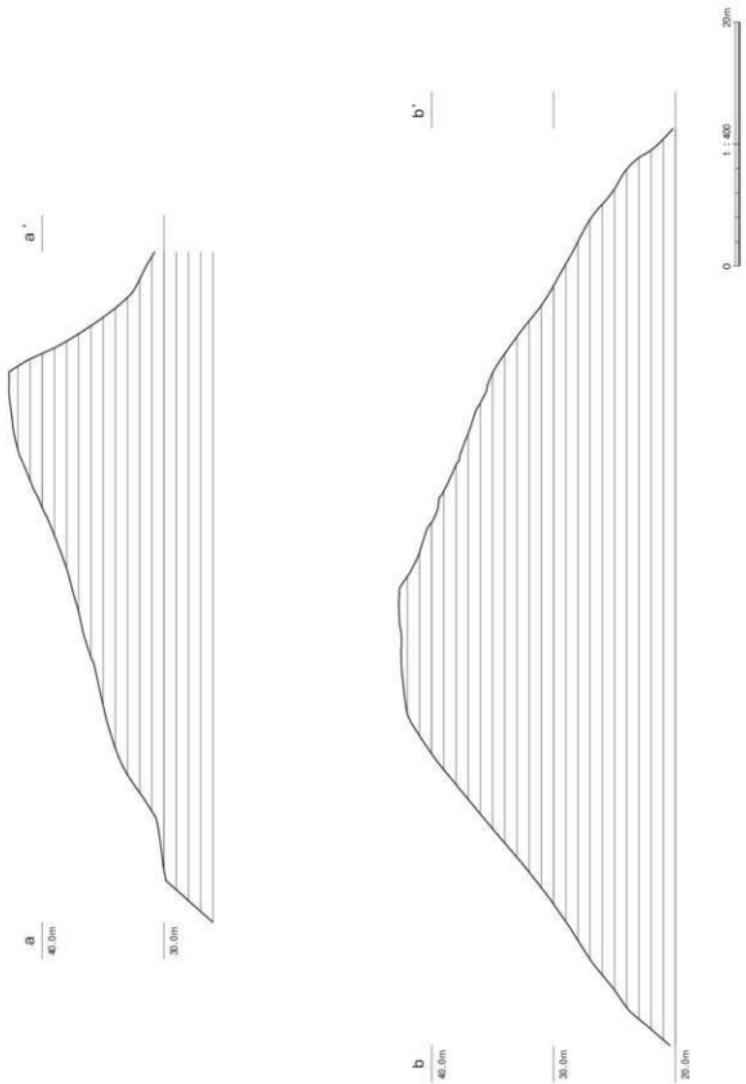
墳頂は、墓壙の東西に若干の平坦面がある。墓壙の東（左）側に幅0.7m、深さ0.3mの掘り込みが認められる。

西斜面は、墳丘上部の表土下に、含有物の少ない黄褐色土層（37層）がある。この層は東斜面の墳丘部にもほぼ同様の層が広く分布している（2層）。盛土とも考えられたが、同層は墓壙の陥没痕覆土の上にもみられ、古墳築造後、少なくとも一定程度の期間が経た後に堆積した層といえる。また、しまりが弱い点も盛土と判断しにくい。畑のための造成土や、墳丘に由来する流土等の可能性がある。その下方にある褐色~暗褐色の土層（38~40層）も盛土とは考えにくく、上方からの流土もしくは畑で開墾された土層と考えられる。A層は黄橙色の均質な土質で地山と判断したが、下方の地山は基本的に砂泥の互層を基本としていてやや異質ではある。仮にこれが地山でないとすれば、A層の下端ラインが屈曲した墳裾を示すようにもみえる。この可能性も残るが、この上部はちょうど段々畑の平坦面の跡がみられ、畑の段を造成する際にカットされて現状の土層になったとも想定できる。そのため、墳丘の平面測量から推定される墳裾位置と一致する、標高37.04mの▲位置の地山が小さく立ち上がる地点あたりを墳裾とみたい。ただし、この立ち上がりも畑造成による可能性もある。

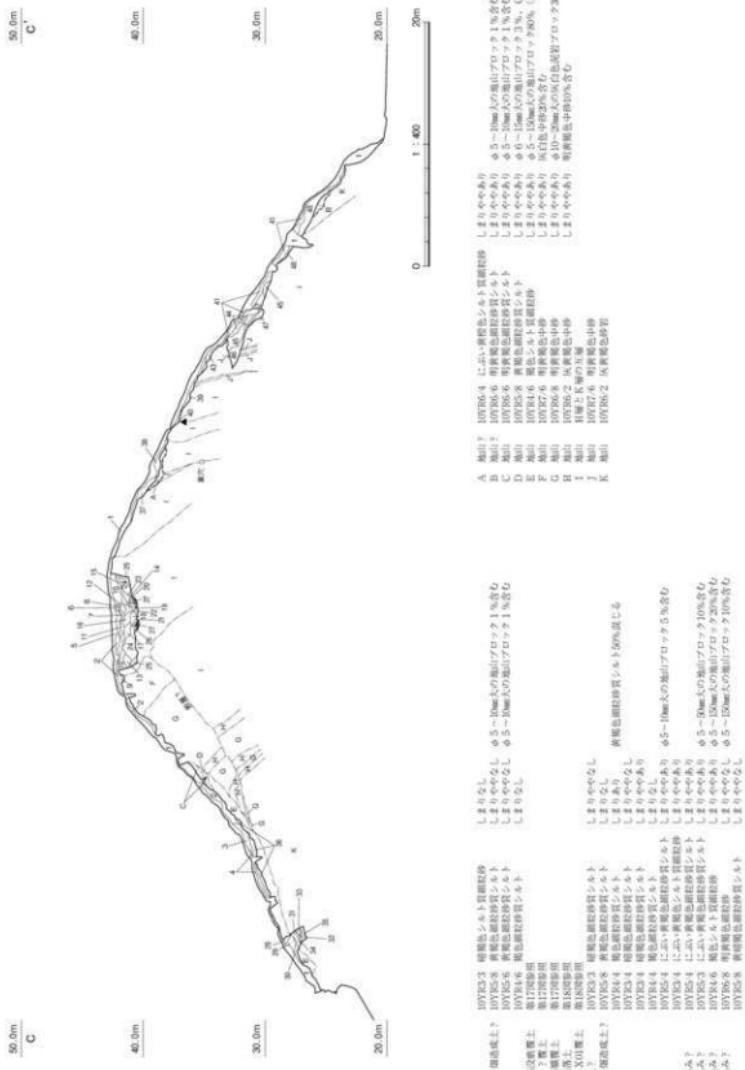
次に東斜面である。地山は西下がりの明黄褐色・灰黄褐色中砂層と灰黄褐色砂岩質層を主体とする。斜面中程から下部にかけて0.5~0.8mの厚さで堆積するE層は地山の風化層で、ブロック状に破碎したような層である。斜面上部に広くみられる2層は、墓壙の上にも見られた古墳築造後と判断される



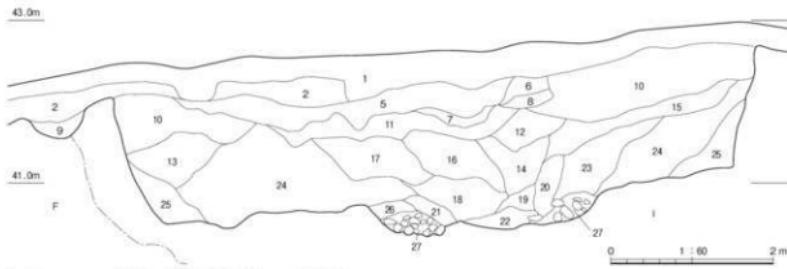
第14図 番神山古墳墳丘平面図



第15図 番神山古墳埴丘断面図

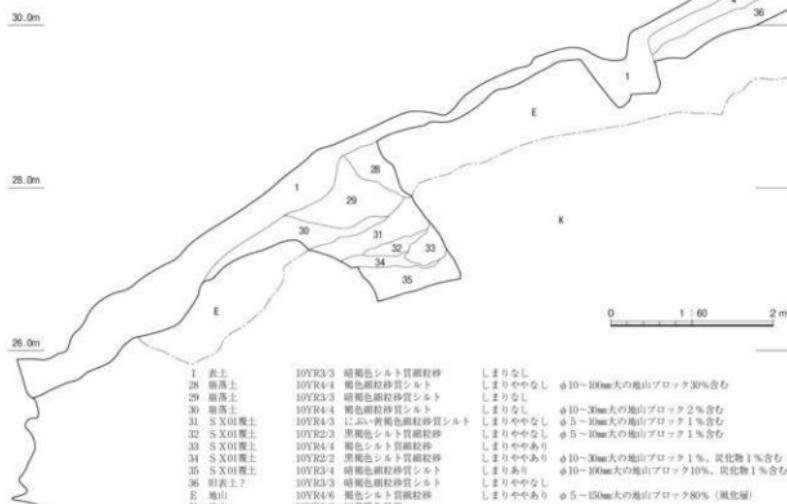


第16図 番神山古墳土層断面見通し図



1 表土	10YR3/3	暗褐色シルト質粘粒砂	しまりなし	
2 流土？礫造成土？	10YR5-8	黄褐色細粒砂質シルト	しまりやかなし	φ 5~10mmの大さの地山ブロック1%含む
5 細粒重覆土	10YR3-2	黒褐色細粒砂質シルト	しまりやかなし	明黄色細粒砂（6層）2%含む
6 細粒重覆土	10YR5-6	黄褐色細粒砂	しまりやかなし	
7 細粒重覆土	10YR5/3	にふく黄褐色シルト質粘粒砂	しまりやかなし	黒褐色シルト20%、φ 10~30mmの大さの地山ブロック1%含む
8 隅沢重覆土	10YR3-2	黒褐色細粒砂質シルト	しまりやかなし	明黄色細粒砂（6層）3%含む
9 隅沢重覆土	10YR5-6	黄褐色細粒砂	しまりあり	φ 20~30mmの大さの地山ブロック2%含む
10 亂層重覆土	10YR5-6	明黄色細粒砂	しまりあり	φ 20~30mmの大さの地山ブロック3%含む
11 亂層重覆土	10YR7-4	にふく黄褐色粘粒砂	しまりあり	φ 10~20mmの大さの地山ブロック2%含む
12 亂層重覆土	10YR7-6	明黄色細粒砂	しまりあり	φ 20~30mmの大さの地山ブロック3%含む
13 亂層重覆土	10YR5-6	黄褐色細粒砂	しまりあり	φ 10~20mmの大さの地山ブロック5%含む
14 亂層重覆土	10YR5-6	明黄色細粒砂	しまりあり	φ 10~70mmの大さの地山ブロック5%含む
15 亂層重覆土	10YR6-6	明黄色細粒砂	しまりあり	φ 10~30mmの大さの地山ブロック10%含む
16 亂層重覆土	10YR7-6	明黄色細粒砂	しまりあり	φ 10~60mmの大さの地山ブロック5%含む
17 亂層重覆土	10YR7-6	明黄色細粒砂	しまりあり	φ 10~60mmの大さの地山ブロック10%含む
18 亂層重覆土	10YR7-6	明黄色細粒砂	しまりあり	φ 5~30mmの大さの地山ブロック2%含む
19 亂層重覆土	10YR5-6	黄褐色細粒砂	しまりあり	φ 10~20mmの大さの地山ブロック3%含む
20 亂層重覆土	10YR7-6	明黄色細粒砂	しまりあり	φ 10~30mmの大さの地山ブロック10%含む
21 亂層重覆土	10YR6-6	にふく黄褐色粘粒砂	しまりあり	φ 10~50mmの大さの地山ブロック1%含む
22 亂層重覆土	10YR7-6	明黄色細粒砂	しまりあり	φ 5~20mmの大さの地山ブロック1%含む
23 亂層重覆土	10YR7-6	明黄色細粒砂	しまりあり	φ 10~60mmの大さの地山ブロック3%含む
24 亂層重覆土	10YR7-6	明黄色細粒砂	しまりあり	φ 5~100mmの大さの地山ブロック10%含む
25 亂層重覆土	10YR5-6	明黄色細粒砂	しまりあり	φ 5~20mmの大さの地山ブロック1%含む
26 亂層重覆土	10YR5-6	明黄色細粒砂	しまりやかなし	φ 10~20mmの大さの地山ブロック10%含む
27 亂層重覆土	10YR7-6	明黄色細粒砂	しまりなし	φ 70~200mmの大さの円盤含む
H 地山	10YR6-2	灰褐色細粒砂	しまりややあり	
I 地山		且屋と長屋の互層		
K 地山	10YR6-2	灰褐色細粒砂	しまりややあり	明黄色細粒砂中10%含む

第17図 番神山古墳墓壙土層断面図



第18図 S X01土層断面図

堆積層で、盛土とは考えにくい。標高31m付近を境に地山の傾斜が変わるが、前節の墳丘測量や西斜面の墳壠との位置関係を踏まえると、墳壠はこれより上部の標高34.0m付近を想定したい。地山E層の直上にある暗褐色の36層は、旧表土に相当する可能性がある。

S X01（第18図） 東斜面の下部、標高28m付近に幅約1.4m、深さ約1.8mの掘り込みがある。上に向かって広がる歪な方形断面である。底面は平坦で、やや東下がりに傾斜する。西（右）側の壁面はオーバーハングするような掘り方を呈する。上層の28~30層は、地山E層の崩落土である。この断面の左奥の斜面は少し窪んでおり、本遺構との関連がうかがえる。最下層の35層から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果、 2σ 暦年代範囲（確率95.4%）で、1071-1066 cal BC (0.5%) および 1056-919 cal BC (94.9%) であった（第4章）。縄文時代晚期前葉~中葉の暦年代に相当し、この時期の遺構の可能性がある。

また、昭和40年の土砂採取工事の際、このあたりで7基の横穴墓（番神山横穴墓群B地区）が確認されており、横穴墓の羨道部もあり得るかもしれない。横穴墓とすれば、玄室は削平された手前側に存在したものであろう。上記の年代測定については炭化物の混入が考えられる。岡崎1967の横穴墓群分布図（第7図）では、このすぐ近くでB地区6号墓が検出されており、この羨道の可能性もある。

その他 墳丘西斜面の標高32m付近では、横方向のV字形の掘り込みが認められた。幅約2.4m、高さ約1.4mである。当初横穴墓かとも考えたが、以下の理由から積極的に捉えにくい。まず、奥が鋭角となり、玄室の断面形態として不自然である。天井部が崩落したこととも考えられたが、断面観察では崩落した様子は認められなかった。また、底面が西下がりに傾斜しているのもやや不自然であるほか、基盤となる周囲の地山が砂泥の互層状で脆く、横穴墓の構築箇所として適当とは考えにくいという点もある。一方で、倒木痕や動物が掘る穴としては整いすぎていて、規模も大きく、性格の特定には至らなかった。なお、法面の中央右寄り、標高35m付近の穴は、幅0.3m、高さ0.5mほどで奥に続いている。規模や位置から穴熊等の巣穴であろう。

第4節 地表面で確認された横穴墓（第19図）

番神山古墳の墳丘測量に伴う伐採後に、古墳下方の南斜面で2基の横穴墓を確認した。

番神山古墳の南側は緩斜面となり、標高34m付近で落ち込んだ後、31m付近で再び平坦に近い緩斜面になる。この面は、南側が崖によって失われているが、周辺地形から推測すると南北・東西とも8m程度であろう。横穴墓はその奥部で東西に2基並んで見つかり、南方向に小さく開口している。

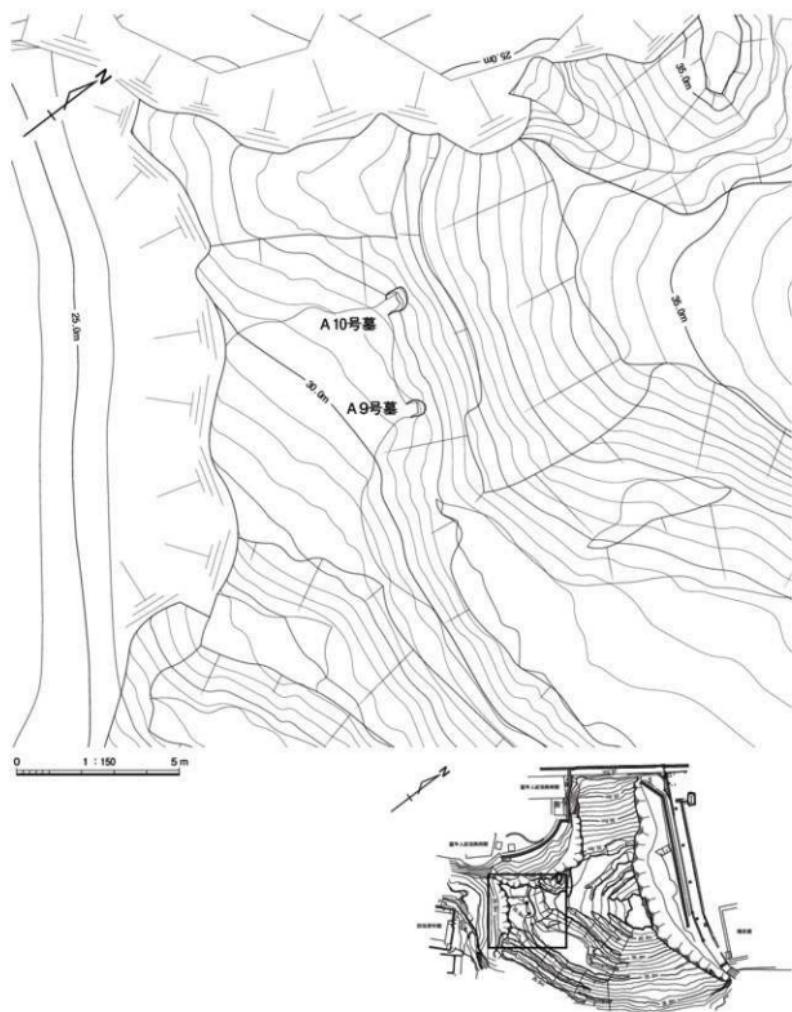
この2基は、第2章第3節で記した番神山横穴墓群のうち、昭和3年工事で発見されたA地区に含まれる一群とみてよい。A地区は、今回発見した2基の西側の削平地点、現在は草牛人記念美術館が建つあたりに相当する。A地区ではこれまで8基の横穴墓が確認されているため、今回発見の2基は、東側をA9号墓、西側をA10号墓と呼称する。

A9号墓は、幅0.3m、高さ0.3m程が開口している。内部にカメラを差し込んだところ、アーチ状の天井を確認した（図版8）。内部は天井近くまで埋没している。天井が大きく崩れた様子は認められないため、外から流れ込んだ土砂であろう。A10号墓は、幅0.3m、高さ0.35m程が開口している。内部にカメラを入れてみたが、こちらは一部崩落しているためか、A9号墓のような明瞭な空間や玄室形状は認められなかった。A9号墓と共通する立地・開口状況から横穴墓と判断する。

A地区的横穴墓は、斜面の下段に1基、中段に4基、上段に3基が分布したことが確認されている（第8図 大村1931a）。今回発見の2基は、上段3基とはほぼ同じレベルに位置するものと推測される。

これまで確認されていた8基は西に開口するが、南に開口する今回発見の2基は、より広範囲に横穴墓が分布していたことを示す。

(野垣)



第19図 番神山横穴墓群 A 9号墓・A 10号墓平面図

第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

1 はじめに

S X01から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

試料は、第35層の土壤から抽出した炭化材1点である。なお、炭化材は最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。

測定試料の情報、調製データは第1表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

第1表 測定試料および処理

測定番号	道路データ	試料データ	前処理
PLD-41141	道構：S X01 層位：第35層	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L 塩酸：1.2 mol/L）

3 結果

第2表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、曆年較正結果を、第20図に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の曆年較正にはOxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、 1σ 曆年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2σ 曆年代範囲は95.4%信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範

囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

4 考 察

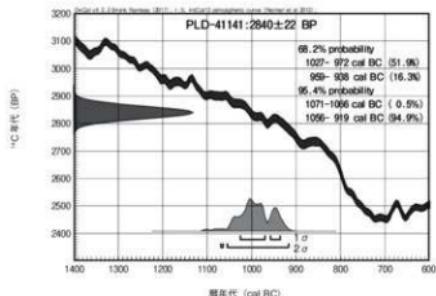
S X01第35層の土壌から抽出した炭化材（PLD-41141）は、 2σ 暦年代範囲（確率95.4%）に着目すると1071–1066 cal BC (0.5%)および1056–919 cal BC (94.9%)であった。小林（2017）によると、縄文時代晚期前葉～中葉の暦年代に相当する。

なお、木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回分析を行った炭化材は、最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木材が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

（株式会社パレオ・ラボ AMS年代測定グループ：伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・黒沼保子）

第2表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	暦年校正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-41141	-28.67 \pm 0.18	2840 \pm 22	2840 \pm 20	1027–972 cal BC (51.9%) 959–938 cal BC (16.3%)	1071–1066 cal BC (0.5%) 1056–919 cal BC (94.9%)



第20図 暦年校正結果

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337–360.
中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」日本第四紀学会, 3–20.
小林謙一(2017)縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—. 263p. 同成社.
Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869–1887.

第5章 総括

第1節 番神山古墳の墳丘形態と埋葬施設の復元

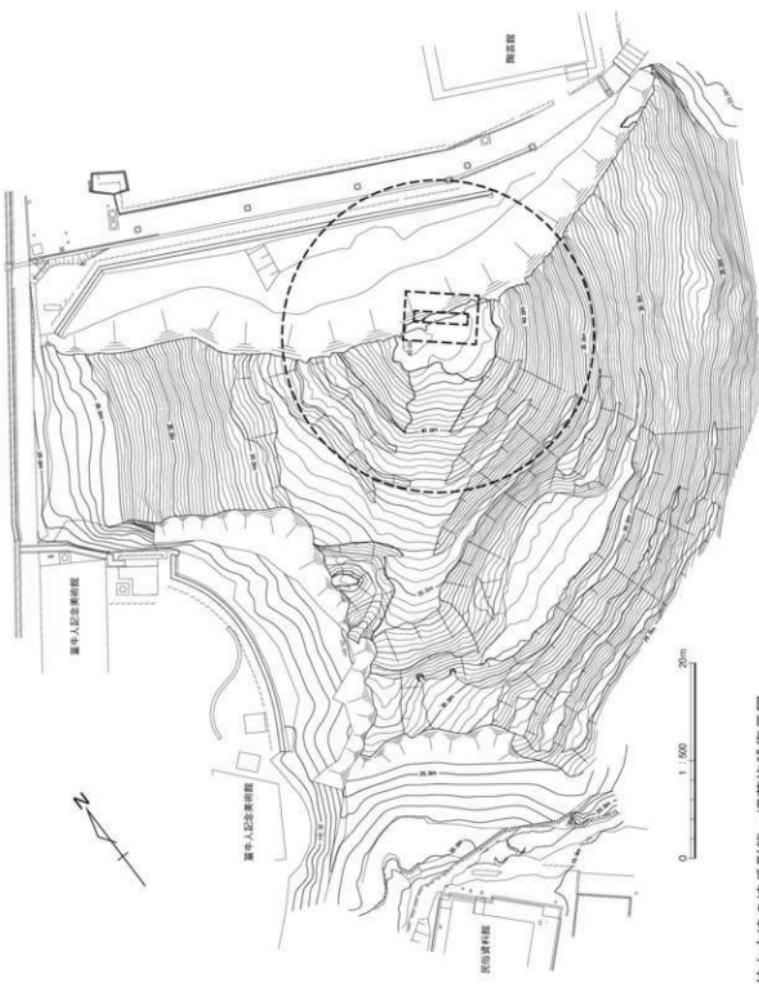
墳丘形態の復元 番神山古墳の墳丘は、近代以降の畠の造成により改変を受けているほか、北半が完全に削平されており、一見してそれとわかる平面形態や規模を見て取れるわけではない。結論から述べると、第21図のとおり円形の墳丘を復元するが、以下で検討する。

墳丘およびその周辺は、斜面に段々畠跡の平坦面が幾筋か認められる。この畠跡がみられない北東斜面は、比較的直線的な等高線を看取できる。この部分を仮に方墳の一辺とみた場合、段々畠跡がみられる南東や西斜面の等高線は、それに対して直角ないし平行ではなく、斜めのラインを示し、方形とはみなしづらい。あるいは、西斜面の標高37m付近の段々畠の下端ラインあたりを方墳の裾の一辺とみれば、南東斜面の段々畠が直交する一辺をなすように見えるが、この場合、東斜面の等高線の流れが合致せず、また尾根筋に対してほぼ45°傾く方墳になる点も不自然である。

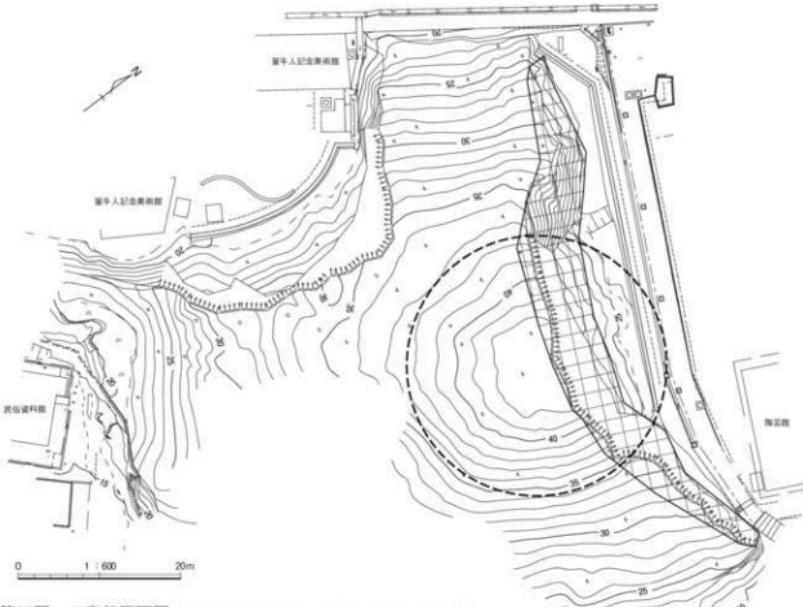
近代以降の畠造成時に改変はあったであろうが、段々畠という土地利用を考えた場合、元の地形を利用して畠を造ったとみるのが自然であり、大規模な改変が行われたとは考えにくい。すなわち、現況地形はおおよそ畠造成前の地形を残しているとみられ、ここから判断すると円形の墳丘形態が現況に合致する。墳頂部は南側が抉れたようになり、きれいな円形とはならないが、第3章第2節で記したとおり、墳丘の南斜面は近代以降に上部を削って斜面を緩くする造成がなされたとみられる。よって、墳頂部の南側の変換線も本来は弧状にめぐっていたと考えられる。

次に墳裾について確認する。まず西斜面では、標高37.0~37.50m付近を境に傾斜が変わり、平坦に近い緩斜面となる。土層断面でも、この位置に若干の立ち上がりが認められる（第16図の▲位置）。一方、東斜面は自然地形と一連になったような急傾斜のため明瞭でないものの、平面測量図では標高34.0m付近を境に等高線間隔が若干広がる。また、第22図の工事前平面図をみると、崖際の標高33m以下の等高線は北に向かって直線的に延びるのに対し、34・35m等高線は西にやや湾曲しており、墳丘を反映している可能性がある。このあたりを東側の墳裾とみた場合、墳頂に対して西側墳裾と平面的におおよそ対称な位置となり、直径約32mの墳丘を復元できる。立面上には東斜面は傾斜が急な分、墳裾は西・南裾より約3.0~3.5m低い位置をめぐる。東裾からの高さは約9mと同規模の古墳よりも高くなるが、急峻な自然地形に規定された結果といえる。同時に平野から墳丘を大きく見せる効果もあったであろう。なお、第3章第3節で記したとおり、第16図のA層を地山でないとみれば、同層の下端ラインが西側墳裾となる可能性も残る。これに基づき東側墳裾も対称位置に想定すると、規模は直径約24mとなる。平面測量図や、長大な墓壙の存在、第12図の古写真を踏まえると、現状では直径約32mの方の蓋然性が高いと考える。よって、第21図の復元図もそれに基づき作成した。

以上から、墳丘形態の要点をまとめると次のとおりである。墳形は円墳である。ただし、削平された北側の尾根筋に前方部が存在した前方後円墳の可能性もある。円墳とした場合、規模は直径約32mと推測する。墳頂は幅約10mの平坦面となる。墳丘高は地表面ベースで、西裾から約5.5~6m、南裾から約5.5m、東裾から約9.0mである。土層を確認できた東西斜面は、自然地形を最大限利用し、地山削り出しを基本として築成している。周溝はみられず、段築も確認できない。葺石・埴輪等の外表施設もこれまで確認されておらず、存在しないとみてよい。墳頂最高点の標高は42.99mで、東側の平野との比高差は約33mである。



第21図 番神山古墳の地形形態・埋葬施設復元図



第22図 工事前平面図（公園緑地課提供図を一部改変、墳丘ライン加筆）

墓壙の復元 調査では墳頂部の断面に長大な掘込墓壙を確認した。この断面は、第3章第3節で検討したとおり、平面長方形の墓壙の対角線に近いラインの断面を見ているものと判断する（第21図）。その理由を再度記すと、まず、墓壙上層に堆積する陥没痕の黒褐色土層が、東（左）側に広がることから、断面に対して棺が浅い角度で斜交している状況が推定できる。墓壙底面の2ヶ所の縄群の間をピンボールで確認したところ、西側縄群の左側では20cm前後奥で縄にあたった。これは西側の縄群が、真後ろでなく、左斜め奥に延びていることを示す。一方、東側の縄群は、左側において縄は当たらなかった。理由は不明だが、凸凹のある縄の並びのため当たらなかつたか、途切れている可能性を考えたい。第二に、木棺が置かれた掘り込み位置が、西（右）側に片寄っている点がある。木棺が墓壙のほぼ中央に配置されたとする前提にたてば、第21図のような傾きを想定すると理由が説明できる。ただし、これについては木棺が中央に置かれない事例もあり、副次的ではある。さらに、断面から推定される木棺の幅や土層も、斜交する状況を想定しなければ不自然さがある。現状の断面に対して墓壙がどの程度斜交しているかについては、おおよその見積もりでしかないが $25\sim30^\circ$ 程度とみておく。この場合、墓壙の主軸はN-47°~52°-Wとなる。また、墓壙底面の東（左）部に浅い掘り込みがあるが、ピット状か溝状となるかは不詳である。

以上からおおよその墓壙規模を推測すると、長辺7.5m前後、短辺は4m以上か。検出レベルからの深さは、西壁際が1.50m、東壁際が1.56m、中央の最深部が1.89mである。粘土等による構造は認められず、木棺直葬であろう。

木棺の推定 木棺の痕跡は確認できず、赤色顔料等もないため木棺の形態を知る直接的な手がかり

はないが、断面から推定する。

木棺が置かれた一段深い掘り込み部の礫の間に粘土や整地層は認められないことから、地山の掘り込み面をそのまま棺床にしたと考える。棺床となるこの掘り込み面は緩やかに湾曲している。湾曲はかなり緩いが、前項で示したとおり、断面は墓壙を斜めに切っていると考えられるため、木棺も純粹な横断面ではなく、斜めに切られた横長の梢円に近い形をみせていることになり、底面の湾曲はその横長梢円の長軸側の弧を反映しているとみられる。よって、実際の横断面では現状より湾曲は強くなるため、このことから剖抜式木棺が推定される。一断面からの推測のため、より具体的に割竹形木棺か舟形木棺かまでは言及できない。なお、墓壙底面の高低差から頭位は北西と考える。

木棺の長さは、墓壙規模からみると5~6m程度あったと推測できる。幅は、断面をみると、両側の礫群のそれぞれ内側半分程が、中央の掘り込み底面の湾曲から続くように外に向かって緩やかに上がる堆積を示し、上部の層も合わせて考えると、棺身の両端は礫群の上に乗る状況だったとみられる。18~22層がある幅約1.7mの範囲がおおよそ木棺範囲と推定でき、現状断面に対する木棺の傾きを25~30°とするなら、実際の横断面での幅は、三角比からその0.42~0.50倍、すなわち約0.71~0.85mが最大となるか。両側の礫については、木棺周囲を全周していたか不明だが、設置は排水目的と考えられる。また、上記した状況から棺身を固定する役割もあったとみられ、棺床粘土などと同様の意図をもった構造的な類似を指摘できるかもしれない。

なお、石川県能美市秋山山2号墳の復元木棺のように、組み合わせ式木棺でも棺身の底部が湾曲する例があり（能美市教委2011）、掘り込み面の湾曲からただちに剖抜式木棺を想定するのは早計かもしれないが、周辺に類例が求められる剖抜式木棺を第一に考えたい。

第2節 番神山古墳の築造時期

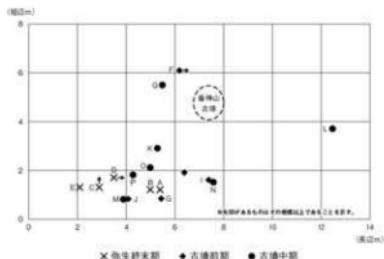
築造時期について、堅穴系の埋葬施設から概ね古墳時代中期以前であることは認められる。出土遺物がなく詳しい時期の比定が難しいが、古墳の各要素から検討したい。

墳丘平面形 墳丘の平面形は円形とみられることから、県内の様相を踏まえれば弥生時代の墳丘墓は考えにくく、古墳時代の円墳とみてよい。富山県では、古墳時代前期は方形墳が多いが、円形墳も存在する。また、番神山古墳に近い百塚住吉遺跡では、前期前葉に遡る北陸最古段階の前方後円墳がすでに出現しており（富山市教委2009）、円形墳であることを根拠とした時期の絞り込みは難しい。

墓壙規模 第23図は、富山県の弥生時代終末期から古墳時代中期の墳墓のうち、時期が判明するものの墓壙規模を比較したものである。本墳とある程度規模が近い墳墓で比較するため、墳丘規模が20m以上のものを対象とした。これをみると弥生時代終末期の墳墓に比べて、古墳時代前・中期の古墳は、墓壙規模が大きい傾向がある。番神山古墳で推定した7.5m前後×4m以上という長大な墓壙は、上記の墳丘平面形と同様、古墳時代以降に位置付けられることを示す。

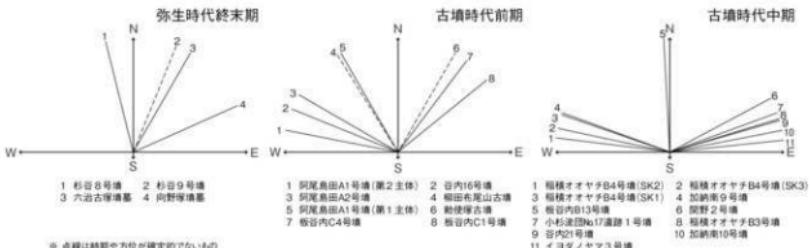
木棺 木棺については剖抜式木棺と推定した。北陸地方の前期古墳の木棺を集成した石橋宏氏によると、剖抜式木棺は弥生時代後・終末期から点的に分布し、富山県でも百塚遺跡や杉谷A遺跡で確認されている。古墳時代前期も谷内16号墳や阿尾島田A1号墳で例があるが、北陸では5mを越える長大な木棺が採用されるのは主に集成編年3期以降とされる（石橋2016）。番神山古墳の木棺は、墓壙規模から考えると長さ5~6m前後と推測され、このことを重視すれば、集成編年3期以降、すなわち前期後半以降の可能性が高まる。

埋葬施設の構造 本墳の埋葬施設の特徴の一つである木棺両側の礫群についてみると、同様に礫が



第23図 富山県における弥生時代終末期から古墳時代中期墳墓の墓壙規模

番号	古墳名	埋葬施設	墓壙規模(m) (方×奥×高)	時期
A	村谷8号墳	方・35×30m	5.4±1.2	弥生終末期
B	村谷9号墳	方・28×30m	5.0±1.2	弥生終末期
C	六治古墳墳場	底面積21~34.5m (東方倒置)	2.8±1.3±2上	弥生終末期
D	駒野塚墳場	前方後方・25~30m	3.5±1.1±1.7	弥生終末期
E	蓬之山古墳	方・26×34m	2.1±1.3	弥生終末期
F	鶴谷塚古墳	前方後方・36m	0.31±1.2±0.3	古墳時代
G	谷内16号墳	前方後方・47.6m	5.45±0.83	古墳時代
H	阿尾島田1号墳 (第1主体)	円・24m	5.4±1.5	古墳時代
I	阿尾島田2号墳 (第2主体)	前方後方・70m	7.4±1.6	古墳時代
J	阿尾島田3号墳	前方後方・70m	4.64±0.32	古墳時代
K	小北佐賀墓墳場(内藤路1号墳)	円・30×28m	5.3±2.3	古墳時代
L	白石1号墳	円・38m	12~13±3.7	古墳時代
M	閑野2号墳	方・25.5m	3.8±0.3	古墳時代
N	鶴様オヤサ田B2号墳	円・20m	7.8±1.5	古墳時代
O	鶴様オヤサ田B4号墳	円・22m	5.0±2.1	古墳時代
P	鶴谷内C4号墳	前方後方・38m	4.3±1.8	古墳時代
Q	イヨノノヤマ3号墳	円・20.5m	5.5±5.5	古墳時代



第24図 富山県における弥生時代終末期から古墳時代中期墳墓の埋葬施設の主軸方位

めぐる例は、北陸では富山市百塚遺跡S Z07や福井市片山鳥越5号墓第1埋葬で、弥生時代終末期の例がある。しかし、これらは組み合わせ式木棺で、時期が異なることも含めて、本墳とは同列に扱えないと考える。

そこで、北陸において剖抜式木棺で礫を有する埋葬施設を見ると、本墳と同じ木棺側縁に厚く礫を配置する例は管見に触れないが、特に福井県において木棺の小口にあたる部分に礫を配置する古墳が散見される。また、側縁にもまばらに礫を配置する例がある。これらは古墳時代前期後半から中期の古墳に多い。小口に礫を配置する例は、排水目的と推定される本墳とは構造的に異なるが、礫構造を有する点は注意したい。また、前期後半築造の石川県中能登町雨の宮1号墳の粘土櫛は、剖竹形木棺の下部に礫を敷き均すとともに、棺身と棺蓋の合わせ目レベルで排水のためかとされる砂利をまばらに撒いている（鹿西町教委2005）。本墳の礫は厚みがあり、雨の宮例とは異なるが、礫の上面が棺身と棺蓋の合わせ目付近にあたると推定できる点は、雨の宮例と似る。また、本章第1節の木棺の推定で記したように、本墳の礫群が粘土櫛における棺床粘土と同様の役割を有した可能性もある。以上のとおり前期後半から中期の古墳と一部類似が認められる。

埋葬施設の主軸方位 番神山古墳の埋葬施設の主軸は、N -47~52° -W前後と推定した。県内の事例との比較のため、第24図に弥生時代終末期から古墳時代中期の埋葬施設の主軸を示した。埋葬頭位が不明なものもあるため、主軸方位として示したものである。報告書から筆者が測定・推測したものを含む。また方形周溝墓は含めていない。これによると、弥生時代は南北方位が優位である。古墳

時代前期は特定方位への指向性は認めにくいが、中期は1例を除きすべて東西方位を示す。北陸地方全体や石川県については、古墳時代前期は北優位で、中期にはその傾向が崩れることが指摘されている（小矢部市教委1988、伊藤1989）。これらと比べると、富山県の前期は、南北主軸の例がすべて北頭位であったとしても北優位が目立たず、むしろ中期における東西方位が際立つ。これを踏まえると、番神山古墳で推定したN-47°~52°-W前後の主軸は、微妙なところではあるが、前期的な様相に近いかもしれない。

小 結 以上を総合すると、築造時期は古墳時代前期後半が有力となる。埋葬施設の主軸方位を重視しなければ中期の可能性もある。もとより前提とした番神山古墳の各要素自体、確たるものが多く、流動性は多分にある。たとえば、木棺構造や埋葬施設の主軸方位は、一断面からの推測であり、それ自体正しいかどうか検証を要する。その前提が違えば当然時期判断も変わる。不確定要素はあるが、積極的に捉えた見解として上記時期を示しておきたい。

第3節 番神山古墳が提起する問題

今回の調査で新たに確認された番神山古墳について、築造時期は古墳時代前期後半が有力と推測した。北東約1.8kmの呉羽丘陵北端部では、2005~2008年度の百塚遺跡、百塚住吉遺跡の調査で30基の墳墓（百塚古墳群）が発見された。弥生時代後期後半から古墳時代前期前半を中心とし、北陸最古級の前方後円墳を含む（富山市教委2009・2012）。また、番神山古墳の北東400mの尾根上にある杉坂古墳群は、方形墳と円形墳が混在し、築造開始期は番神山古墳より古い可能性が高い。番神山古墳が前期後半の築造であるなら、百塚古墳群や杉坂古墳群に続く勢力の奥津城といえる。また、両古墳群の規模が10m前後から20m代前半であることと比較すると、それまでより突出した首長の誕生を示唆する。

小黒智久氏は、前期前半には、百塚古墳群など呉羽丘陵北部勢力に比べて、羽根丘陵や呉羽丘陵南部勢力の優位性を指摘している（富山市教委2009）。一方、前期後半には、羽根丘陵は集成編年3期の王塚古墳の築造をもって大型古墳の築造が途絶えるため、逆に番神山古墳を中心とする呉羽丘陵北部の優位性が高まったことを想定できるかもしれない。その背後には畿内の政治動向との連動があつたことも推定される。

本報告では円墳として復元図を示したが、前方後円墳の可能性もある。前方後円墳の場合、規模は50~60m級になると推定され、県内最大の前方後円墳、阿尾島田A1号墳（約70m）、2位の閥野1号墳（65m）に迫り、また、富山県東部では最大である勅使塚古墳（前方後方墳・66m）や王塚古墳（前方後方墳・58m）に匹敵する。古墳時代の勢力図を見直す必要が生じよう。また、高橋浩二氏の次の指摘が注意される。すなわち、前期および前期と推定される前方後円（方）墳は、呉羽丘陵東縁辺に沿う形で墳丘主軸を概ね北東-南西に向けるのに対し、それぞれ中期・後期と推定される古沢塚山古墳と呉羽山丘陵N26号墳は、90°異なる北西-南東に向ける。また、前者は東部の平野を、中期の古沢塚山古墳は西部を見晴らす立地にある（高橋2007）。番神山古墳の築造時期を前期後半とする見方が正しく、かつ前方後円墳だったとすれば、本墳はこの立地傾向と一致する。

円墳の場合でも直径約32mという規模は、その時期を問わず、県内の首長墳の動向をめぐる議論に一石を投じよう。前期であれば同等以上の規模の円墳は県内で確認されておらず、その特異性が注目されるであろうし、仮に中期としても、富山県東部では唯一白岩川流域が大型円墳の分布域とされてきたこれまでの理解に修正を迫ることになる。

番神山古墳からは東側の富山平野が一望でき、明らかに東からの眺望を意識した立地にあるが、周辺以下の平野に古墳時代の集落は確認されておらず、居住域は未詳である。また、本墳の直下に後期～終末期の番神山横穴墓群が集中して築かれるのは、立地上の偶然か、あるいは本墳との関係を意識した選地であったのかも気にかかるところである。

推測を重ねる議論となつたが、少なくとも大型の墳丘と長大な墓壙を有する有力墳であることは認めてよいであろう。今後、呉羽丘陵周辺という狭い枠組みでなく、県内の首長系譜をめぐる議論に大きな影響を及ぼすことになると思われる。

(野垣)

引用・参考文献

- 石橋 宏 2016「城の山古墳出土刻抜式木棺の位置付け」『城の山古墳発掘調査報告書』胎内市教育委員会
- 伊藤雅文 1989「石川における前半期古墳小考」「北陸の考古学」Ⅱ 石川考古学研究会
- 大野英子 2007「王塚・千坊山道跡群」同成社
- 大村正之 1931a「呉羽山古墳横穴群」「富山県史跡名勝天然記念物調査報告」第11集 富山県学務部
- 大村正之 1931b「呉羽山古墳横穴式石槨」「富山県史跡名勝天然記念物調査報告」第11集 富山県学務部
- 岡崎卯一 1967「富山市安養坊番神山の横穴」「大境」第3号 富山考古学会
- 岡崎卯一 1968「富山市安養坊横穴第7号墓の調査」「大境」第4号 富山考古学会
- 岡林孝作 2018「古墳時代棺槨の構造と系譜」同成社
- 小黒智久 2006「越中における古墳編年」「北陸の古墳編年」再検討 平成17年度富山大学人文学部公開研究会
- 小黒智久・野垣好史 2006「富山市番神山横穴墓群出土遺物について」「富山市考古資料館紀要」第25号
- 小矢部市教育委員会 1987「閔野古墳群」
- 小矢部市教育委員会 1988「谷内16号古墳」
- 小矢部市教育委員会 1992「谷内21号墳」
- 高瀬重雄監修 1994「富山県の地名」 平凡社
- 高橋浩二 2007「富山の古墳－氷見・雨晴の首長と日本海－」富山県・日本海学進機構
- 高橋浩二 2015「呉羽丘陵の古墳とその意義」 富山市考古資料館ミニ企画展「呉羽丘陵の古墳」開催行事資料
- 富山県 1909「富山県写真集」
- 富山県教育委員会 1980「富山県小杉町・大門町 小杉流連業務団地内遺跡群 第2次緊急発掘調査概要」
- 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 2003「助馬塚古墳・水代道路・安居窓跡群・中山中道跡発掘調査報告」
- 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 2008「板屋谷内B・C古墳群・堂前道跡発掘調査報告」
- 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 2014a「小竹貝塚発掘調査報告」
- 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 2014b「加納南古墳群・福積オオヤチ古墳群 発掘調査報告」
- 富山考古学会 1999「富山平野の出現期古墳」富山市教育委員会 1976「富山市吉沢・金屋地内古墳概要調査報告書」
- 富山市教育委員会 1984「富山市呉羽丘陵古墳分布調査報告書」
- 富山市教育委員会 1987「長岡杉林道跡」
- 富山市教育委員会 1999「史跡北代道跡ふるさと歴史の広場整備事業報告書」
- 富山市教育委員会 2000「向野池道跡」
- 富山市教育委員会 2001「開ヶ岳中山IV道跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2003「長岡八町道跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2004a「北代加茂下II道跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2004b「打出道跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2008a「八町II道跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2008b「北押川B道跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2009「百塚住吉道跡・百塚住吉B道跡・百塚道跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2012「白塚道跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2015「八ヶ山A道跡発掘調査報告書」
- 富山大学人文学部考古学研究室 2007「阿尾島田古墳群の研究」
- 西井龍儀・藤田富士夫 1976「呉羽山丘陵の先土器・绳文時代草創期の道跡について」「大境」第6号 富山考古学会
- 能美市教育委員会 2011「史跡秋常山古墳群保存整備事業報告書 調査編」
- 水見市編纂委員会 2002「水見市史」7 資料編5 考古
- 藤井昭二 1994「呉羽丘陵（地形・地質）」「富山大百科事典」北日本新聞社
- 藤井昭二 2000「大地の記憶－富山の自然史－」桂書房
- 婦中町教育委員会 2002「坊山道跡群試掘調査報告書」
- 古川知明 1999「移坂古墳群」「富山平野の出現期古墳」富山考古学会
- 古川知明 2006「甘粕健潟大学名誉教授の古墳見学に随行して」「連絡紙」185 富山考古学会
- 細辻嘉門 2010「弥生時代前期・中期の道跡 富山市の道跡」「大境」第28号 富山考古学会
- 山崎 実 1992「番神山出土の須恵器について」「富山市考古資料館報」第22号
- 鹿野町教育委員会 2005「史跡雨の宮古墳群」